

上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿

——李商隱篇(10)——

門 脇 廣 文

Commentary on the Five Poems of Li Shang-yin in the *Tang-shi jian-shang ci-dian* (Dictionary for the Appreciation of the Tang Poems. Published by the Shang-hai Dictionary publication Company)

——A Draft Translation with Annotations.

KADOWAKI Hirofumi

[目 次]

はじめに

[36] 齊宮詞	劉学錯
[37] 十一月中旬至扶風界見梅花	周振甫
[38] 漢宮詞	何国治
[39] 馬嵬 (其二)	霍松林
[40] 富平少侯	劉学錯

はじめに

昨年度(2001年度)にひきつづき、上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》所収の李商隱詩についての賞析文の訳注稿五篇を公表する。現在のメンバーは大東文化大学大学院博士課程後期3年の三枝秀子、学部卒業生の関久美子(現在、東京学芸大学大学院修士課程2年)、大東文化大学大学院博士課程前期2年の宮下聖俊・鈴木拓也・秋谷幸治、博士課程前期1年の李怡静そして私(門脇)の七人である。なお、今回の担当者は次の通り。

[36] 齊宮詞	関久美子
[37] 十一月中旬至扶風界見梅花	三枝秀子
[38] 漢宮詞	宮下聖俊
[39] 馬嵬 (其二)	鈴木拓也
[40] 富平少侯	秋谷幸治

齊宮詞

永 寿 兵 来 夜 不 扃
 金 蓮 無 復 印 中 庭
 梁 台 歌 管 三 更 罷
 猶 自 風 搖 九 子 鈴

齊宮詞

永寿 兵来たりて 夜^{とぎ} 扃さず
 金蓮 復^{また}た中庭に印する無し
 梁台の歌管 三更^やに罷み
 猶^な自ほ 風の九子鈴を揺らす

この詩は〈齊宮詞〉と題されているが、実際には南朝の齊と梁の二つの時代について詠んだものである。一見すると、内容が題名にそぐわないように見える。だが、そこには奥深い意味が含まれており、構想、表現方法ともに独特の風格を備えている。

1

前半二句（永寿兵来夜不扃 金蓮無復印中庭）は、齊の滅亡を描いている。

齊の廢帝⁽¹⁾は潘妃を寵愛し、潘妃のために永寿殿、玉寿殿、神仙殿などの豪華な宮殿を建てた。また、金で蓮の花を作って地面に貼り、その上を潘妃に歩かせては、「歩くごとに蓮の花を生じる」と言ったという。⁽²⁾

永元三年（501）、雍州刺史だった蕭衍^{（後の梁の武帝）}⁽³⁾は、兵を率いて齊の都・建康（現在の南京）に攻め入った。すると齊の將がこれに内応し、夜間、宮殿の門を開けて蕭衍の軍を引き入れると、自らも兵を整え宮殿内に突入した。当夜、含徳殿で音楽を楽しんでいた廢帝は、その直後の寝入りばなを襲われ、斬殺された。⁽⁴⁾

実際には、上記のような事柄が行われる間には、かなり長い時間が経過している。だが、それを短い絶句の中に展開するすべもなく、また、展開させる必要もない。そこで、李商隱は単刀直入に、一連の事柄の断面を切り取るのである。

まず、敵軍がやってきて国が滅ぼされた夜から書きはじめる。そして、「永寿（永寿殿）」や「金蓮（金で作った蓮の花）」にまつわるエピソードを、ごく自然に画面の中に溶け込ませる。こうして、まず齊の滅亡を端的にまとめて語る。そして、その身を滅ぼすまでついぞ悟ることなく、享樂にふけていた廢帝の、淫靡で愚かなありさまを描き出しているのである。さらには、国が滅ぶ前の、贅沢三昧や淫らな暮らしぶりさえもうかがわせる。

一夜の情景を描いているだけなのに、そこから齊の滅んだ原因や過程、歴史的な教訓をうかがい知ることができる。多くの事柄を短い言葉のなかに集約的に表現しているのである。このような表現方法は、芝居での表現方法によく似ている。それは、情景を一定の時間や空間に限定して激しい矛盾のある場面を構成し、舞台上で演じられていることを通してその背景を語るという表現方法である。

詩のなかでは「含徳殿」を「永寿殿」に、夜に宮殿の門を開けたことを「夜になっても門を閉めなかった（夜不扃）」と言いかえている。このような細かい変更は、いずれも、その暮らしぶりを、的をしぼって印象的に表現する必要からなされたものである。国が滅び、廢帝自身も命を落としたことについても、直接的な叙述はなされていない。「金の蓮の花が中庭に置かれることはもうないのだ（金蓮無復印中庭）」と、暗示性に富んだ詠嘆の言葉をもちい、そのニュアンスを伝えるだけにとどめている。「無復（二度と……することはない）」という言葉は、風刺を表すとも、また感慨を表すとも受け取ることができる。感慨を表すことのなかに風刺がこめられており、まことに奥深い。

2

後半の二句「梁台歌管三更罷 猶自風揺九子鈴（梁台の歌管 三更に罷み、猶自ほ 風の九子鈴を揺らす）」では、話題を転じて、「梁台」で催された歌や楽器の演奏のことを述べている。

「梁台（梁の宮殿）」とは、ほんの一昔前までは齊の廢帝が潘妃と享樂にふけていた「齊宮（齊の宮殿）」のことである。宮殿の主が変わったにすぎない。「歌管三更（歌や楽器の演奏が夜中の三更まで続いた）」と「夜不扃（夜に宮殿の門を閉めなかった）」、「猶自（依然として）」と「無復（二度とない）」は、それぞれ呼応している。つまり、同じ場所、同じ時間帯に、違う役者が、同じ芝居的一幕を演じているのである。

李商隱は「梁の宮殿で奏でられている音楽（梁台歌管）」のようすを直に描くこともしなければ、ましてやありふれた叙述や議論もしていない。「九子鈴」という小道具をとらえて、巧妙かつ意味深長な暗示としている。「九子鈴」は、宮殿や寺院の軒先などにつるす飾りである。歴史書によると、かつて齊の廢帝は、莊嚴寺にあった玉の「九子鈴」を奪ってきて、潘妃の宮殿を飾ったという。⁽⁵⁾このことは、廢帝の酒色におぼれた暮らしぶりを語る上では、ほんの小さなエピソードに過ぎない。だが、実に象徴的な出来事である。

李商隱が「九子鈴」を、わざわざ「梁の宮殿で奏でられていた音楽が夜更けに止んだ（梁台歌管三更罷）」時に出現させたのは、ただ齊と梁の二つの時代を結びつけるためだけではない。より重要なのは、これにより、「九子鈴」に以下のようなさまざまな暗示の働きをさせることである。

3

まず、静寂を描くことで直前のにぎわいを引き立たせる。つまり、梁の宮殿ではつい先ほどまで音楽が奏でられ、にぎやかであったことを暗示するのである。絶句には字数の制限がある。したがって、詩のなかに梁宮でのお祭り騒ぎをそのまま描いたのでは、十分には描ききれない。そこで、李商隱はひとまず「梁台の歌管」を持ち出す。しかし、実際に描いているのはその「歌管」の音色が「罷（止）」んだあと、静寂のなかに聞こえてきた、「風が九子鈴を揺らす（風揺九子鈴）」音なのである。このようにして、少し前まで続いていたにぎやかさを、たくみに暗示しているの

だ。歌声や楽器の調べが高らかに鳴りひびくなかでは、鈴の音など聞こえてくることはない。

李商隱の〈呉宮〉詩に見える

呉王宴罷滿宮醉　　呉王の宮殿で開かれた宴が終わり 宮殿内の誰もが酔いしれている

日暮水漂花出城　　日暮れ時 宮殿を流れる水に漂いながら 花は城をあとにする

という句も、これと同様の表現法である。

次に、斉代のことを描くことで梁代の状況を引き立たせる。そして、「梁台」の新しい主人もあいかわらず酒色におぼれる暮らしぶりで、斉が滅んだ教訓など気にも留めていないことを暗示する。「九子鈴」は、斉の廢帝の贅沢で気ままな行いの象徴である。そのような斉代の遺物を、音楽がにぎやかに流れる梁代の宮殿に配し、映画のオーバーラップのように、斉と梁の二つの時代を一つに重ね合わせている。そして、宮殿の新たな主人である梁の皇帝が受け継いだのは、亡国斉の衣鉢であり、彼らが同じ穴のむじなであったことを、ことばの奥底に込めながら表しているのである。「猶自（依然として）」という言葉が、そのことを物語っている。

さらに、すでに終わった芝居的一幕を描くことで、今まさに演じられている一幕を引き立たせる。そして、「梁台」が必ずや崩壊するであろうことを暗示するのである。「九子鈴」は、斉の廢帝の酒色におぼれた暮らしぶりの証であるだけでなく、斉国と廢帝自身の身が滅んだ証でもある。淫らな生活や国の滅亡と関わりのある「九子鈴」は、あいかわらず音楽などを楽しんでいる新王朝にしてみれば、ほかでもなく不吉の前兆なのである。「歌管」のにぎわいが旧王朝のままならば、「永寿殿に敵軍が攻めてきたが、夜になっても宮殿の門を閉めなかった（永寿兵来夜不扃）」という一幕や、「金の蓮の花が中庭に置かれることはもうない（金蓮無復印中庭）」という結末が、ふたたび演じられるのは必至である。

姚培謙は「国が滅びたあとの荒れ果てたようすを、にぎやかな情景を描くなかから巧みに表している。」と評している。⁽⁶⁾ 屈復⁽⁷⁾も、

金の蓮の花は跡形もなくなったが、依然として玉の鈴の音は聞こえている。それも、梁台に音楽が鳴りひびく間は聞こえず、音楽が鳴りやんだ後にである。酒色におぼれた暮らしぶりや国が滅びるありさまを、いちいち語りつくす必要はない。ただ小さな事柄を示すだけで、読む者にそれを分からせることができるのだから。

と述べている。⁽⁸⁾ どちらの評語においても、この詩の斬新で、かつ精巧な構想や、奥深い意味の込められた表現、とりわけ暗示の見事な用い方について、細やかな分析がなされている。

4

作者の意図するところは、以上で全てであるかのようにも見える。もし、単に昔のことをもって今の戒めとし、当時の統治者に、淫らな生活や亡国の歴史的な教訓を示すだけならば、斉のことだけを描けば、それでこと足りる。斉と梁の二つの時代をえがく必要はない。だが、李商隱は、「斉宮」を共通のキーワードにして、斉と梁の統治者のそれぞれに、やりたい放題の道化芝居を演

じさせる。しかも「九子鈴」を用いて、「梁台」の新しい主人が齊とおなじ轍を踏み、歴史的な教訓など意に介さぬさまをあばくことに力を注いでいる。どうやら「亡国 敗君 相継ぐ」⁽⁹⁾という歴史上の現象を通して、何らかの法則性を示そうというのが、その真意のようである。

杜牧⁽¹⁰⁾の〈阿房宮賦〉に言う。

秦の人民は、その国があまりにも急に亡びたため、亡国を悲しむ暇とてなかった。しかし、後世の人びとはそれを哀れに思っている。しかし、後世の人びとが哀れと思いつつも、秦の命運を戒めとしなければ、後世の人びとは〔悲運におちいり〕、さらに後世の人びとによって、哀れと思われることになるであろう。⁽¹¹⁾

李商隱が芸術的なイメージのなかに^{はの}仄めかして明言しないこの詩の主旨を、まるで代弁するがごとく、杜牧がずばりと言いつけている。「梁台の歌管」を力を尽くして詩に詠むこと、それは、まさしく李商隱や杜牧の生きたその時代の統治者の肖像を描くことだったのである。

劉学鍇（関久美子訳）

- (1) 齊の廢帝：南齊の第六代皇帝，蕭宝卷。明帝の第二子。字は智藏。性は奢侈にして，在位三年で王珍国らに弑せられる。東昏侯に追封される。
- (2) 齊の廢帝は潘妃を寵愛し，潘妃のために永寿殿，玉寿殿，神仙殿などの豪華な宮殿を建てた。また，金で蓮の花を作って地面に貼り，その上を潘妃に歩かせては，「歩くごとに蓮の花を生じる」と言ったという。：《南史》齊東昏侯紀に「又鑿金為蓮華以帖地，令潘妃行其上，曰『此步步生蓮華也。』」と見える。
- (3) 蕭衍（後の梁の武帝）：(464-549) 南蘭陵（現在の山東省）の人。字は叔達，小字は練兒。齊の雍州刺史・都督軍事。のち帝位を奪う。在位四十八年。著に《通史》，《孝經義》，《周易講疏》などがある。
- (4) 永元三年（501），雍州刺史だった蕭衍（後の梁の武帝）は，兵を率いて齊の都・建康（現在の南京）に攻め入った。すると齊の將がこれに内応し，夜間，宮殿の門を開けて蕭衍の軍を引き入ると，自らも兵を整え宮殿内に突入した。当夜，含德殿で音楽を楽しんでいた廢帝は，その直後の寝入りばなを襲われ，斬殺された。：《南史》齊東昏侯紀に「（永元三年）十二月丙寅，新除雍州刺史王珍国，侍中張稷率兵殿殺帝，時年十九。」とあり，さらに「蕭衍師至…珍国，張稷懼禍，乃謀応蕭衍，以計告後閣舍人錢強。強許之，密令游盪主崔叔智夜開雲龍門，稷及珍国勒兵入殿，分軍又從西上閣入後宮，御刀豐勇之為内応。是夜，帝在含德殿。吹笙歌作女兒子，臥未熟，聞兵入，趨出北戸，欲還後宮。清曜閣已閉，闔人禁防黃泰平刀傷其膝，仆地，顧曰：『奴反邪』直後張齊斬首，送蕭衍。」と見える。
- (5) 歴史書によると，かつて齊の廢帝は，莊嚴寺にあった玉の九子鈴を奪ってきて，潘妃の宮殿を飾ったという。：《南史》齊東昏侯紀に「莊嚴寺有玉九子鈴，外国寺佛面有光相，禪靈寺塔諸宝珎，皆剥取以施潘妃殿飾。」と見える。
- (6) 姚培謙は「国が滅びたあとの荒れ果てたようすを，にぎやかな情景を描く中から巧みに表している。」と評している。：《李義山詩集箋注》に「荆棘銅駝，妙從熱鬧中写出。」とある。
- (7) 屈復：清の人。著に《玉谿生詩意》がある。
- (8) 屈復も，「金の蓮の花は跡形もなくなったが，依然として玉の鈴の音は聞こえている。それも，梁台に音楽が鳴り響く間は聞こえず，音楽が鳴りやんだ後なのである。酒色におぼれた暮らしぶりや国が滅びるありさまを，一々語り尽くす必要はない。ただ小さな事柄を示すだけで，読む者にそれをわからせることができるのだから。」と述べている。：《玉谿生詩意》に「不見金蓮之跡，猶聞玉鈴之音；不聞于梁台歌管之時，而在既罷之後。荒淫亡国，安能一一写尽，只就微物点出，令人思而得之。」とある。

- (9) 「亡国 敗君 相繼ぐ」：未詳。
- (10) 杜牧：803-852。唐，京兆万年（現在の西安）の人。字は牧之，号は樊川。太和年間の進士。湖州刺史などを経て中書舎人に至る。杜甫の大杜に対し，小杜と称される。
- (11) 「秦の人民は，余りにもその国が急に亡びたため，亡国を悲しむ暇とてなかったが，後世の人びとは哀れと思っている。しかし，後世の人びとが哀れと思いつつも，秦の命運を戒めとしなければ，後世の人びとは〔悲運に陥り〕，さらに後世の人びとによって，哀れと思われることになるであろう。」：「秦人不暇自哀而後人哀之，後人哀之而不鑑之，亦使後人而復哀後人也。」訳文は《漢・魏・六朝・唐・宋散文選》伊藤正文訳（平凡社 中国古典文学大系）による。

[37]

十一月中旬	十一月中旬 扶風の界に至り
至扶風界見梅花	梅の花を見る
匝路亭亭艶	路を匝りて 亭亭と艶かに
非時裊裊香	時に非ざるに 裊裊と香る
素娥惟与月	素娥は惟だ月を与にするのみにして
青女不饒霜 ⁽¹⁾	青女は霜を饒さず
贈遠虚盈手	遠くへ贈らんとするも 虚しく手に盈ち
傷離適断腸	離れを傷むこと 断腸に適ふ
為誰成早秀	誰が為に早秀と成る
不待作年芳	年芳と作るを待たずして

この詩が何年に詠まれたものなのか、いろいろな説があり、いまだに定説はない。ほかの詩から推測すると、王茂元⁽²⁾の幕府に入るために涇原⁽³⁾に赴いた際に詠んだものではないようだ⁽⁴⁾。おそらく、大中5年(851)、東川⁽⁵⁾節度使の柳仲郢⁽⁶⁾の招きに応じて書記となり、蜀に赴いたときに詠まれたものだろう。「扶風」は今の陝西省宝鶏市の東にある⁽⁷⁾。彼の〈韓冬郎⁽⁸⁾即席二首⁽⁹⁾〉に、

劍棧風檣各苦辛、 劍棧⁽¹⁰⁾ 風檣⁽¹¹⁾ 各々苦辛し、
別時冬雪到時春。 別れし時は 冬⁽¹²⁾ 雪ふれるに、 到る時は春。

劍閣に架かる棧道を通っても、舟を使っても、行く道は困難極まりなかった。雪ふる冬にあなたと別れて都を出て、春になってようやく戻って参りました。⁽¹³⁾

という句がある。李商隱が蜀に赴くため都を出たのは大中5年(851)の冬のことだった。それについては、〈悼傷の後東蜀の辟に赴きて散関⁽¹⁴⁾に至り雪に遇ふ(悼傷後赴東蜀辟至散関至遇雪)〉という詩⁽¹⁵⁾も詠まれている。この〈十一月中旬扶風の界に至りて梅の花を見る〉詩は、この年に詠まれたものだろう。

1

第一・二句は「路を匝りて 亭亭と艶かに、時に非ざるに裊裊と香る(匝路亭亭艶 非時裊裊香)」と、冒頭から他の詩にはない奇抜さが見られる。

「裊裊」(意と同じく、yiと発音する。)とは、よい香りがあたり一面に薫るさまをいう。梅の木が「亭亭(すんなり)」とまっすぐに伸び、梅の花が清らかに美しく咲いている。しかし、惜しいことに路の傍ら(匝路)という場違いな場所に咲いてしまっているのだ。梅の花は清らかな香りを漂わせ、その芳しい香りが人のこころにしみわたるようだ。しかし、はやばやと十一月の中旬

に咲いてしまったのである。あきらかに季節はずれ（非時）なのだ。

これは《文心雕龍》の物色篇に「思ひは風物の季節の変化に応じて変わり、言葉はその思ひの変化に応じて発せられる」⁽¹⁶⁾と言われる表現方法である。つまり、李商隱の思ひは梅を詠ずることによって表現されているのである。李商隱の風格や才能は、「亭亭（すんなり）」とまっすぐに伸び、「裊裊と香る」芳しい梅の花そのものではなかったろうか。また、李商隱は牛李の党争に巻き込まれ⁽¹⁷⁾、そのため政界では排斥されていた。このことはまるで「時に非ず」して生まれて来たようなものではなかったろうか。さらに李商隱はあちらこちらの幕府を長い間にわたって転々とする生活を送っていた。これはまるで場違いな所に居るようなものではなかったろうか。

2

第三・四句「素娥は^た惟だ月を^{とも}与にするのみにして、青女は^{みのが}霜を饒さず（素娥惟与月 青女不饒霜）」には、悲痛な思ひが詠まれている。そして前の二句とは異なった詩の境地を開いている。

この二句では、前の二句とおなじく月の下で梅の花をめでている。明の高啓⁽¹⁸⁾の〈梅花詩〉には「月が林の下まで明るく照らし、その中をそぞろ歩きする美人の姿」とある⁽¹⁹⁾。これは梅の花をめでてそれを姿の美しい人に喩えて讃えているものである。しかし、李商隱は、ここではこのような讃え方はしない。また、李商隱自身、〈霜月〉では「月の中、霜の中であでやかさを競いあっている」⁽²⁰⁾と霜にも屈しない梅の花の品性を褒めたたえている。しかし、この詩においては、そのような賛辞もない。

そして、李商隱は独特の表現方法を用いるのである。まず、「素娥（月にいる嫦娥）」に対して「^た惟だ月を^{とも}与にするのみ」だと恨み言をいう。つづくのもやはり、「青女（霜をつかさどる女神）」を叱責する「霜を^{みのが}饒さず（不饒霜）」という言葉なのである。

もともと李商隱の目には次のように映っていた。嫦娥（素娥）が月に清らかな光を放たせるのは、梅の花をさらに美しくさせるためではない。たとえ梅の花がなくとも、嫦娥（素娥）は月を清らかに輝かせることができる。つまり、嫦娥（素娥）はただ月にだけ手をさしのべるだけで、梅の花を助けることはしないのである。

また、「青女」は梅の花の高潔さを見せるために霜を降らすのではない。霜を降らして梅の花を凍らせ、萎れさせようとしているのである。だから「青女」は梅の花が咲くからといって、寛大になって霜を降らせるのを少なくするなどというようなことは決してしないのだ、と。ここには曰わく言い難い恨みが淡々と詠まれている。それは李商隱自身の身の上を感じたことと重なりあっているのである。

3

ここまでで李商隱の思ひはすでに飽和状態になっている。そこで、いきなり詩の流れが変わる。第五・六句では、梅の花に向きあいながら友人を懐かしみ、「遠くへ贈らんとするも 虚しく手に

盈ち、^{わか}離れを傷むこと 断腸に^{かな}適ふ（贈遠虚盈手 傷離適断腸）」と詠むのである。ひと枝の梅の花を手折って遠くにいる友に贈りたいと思う。だが、仕官が思うようにならず、友も日々に疎遠になっていく。たとえ手にいっぱいになる（盈手）ほど梅の花を手折ったところで、いったい何の役に立つというのだろうか。ひと枝の梅の花でさえ友人に送ることもできない。さらにそのことによってより一層、友と離れた悲しみを深く感じてしまう。息が止まってしまいそうなほど悲しく、「断腸（腸がちぎれてしまう）」するほど苦しいのであった。「^{わか}離れを傷む（傷離）」という語には、友と別れて悲しむ意味だけでなく、梅の花と別れることによって「断腸」するという意味も含まれている。それにより詩に奥深さが加わっているのである。

4

第七・八句の「誰が為に早秀と成る 年芳と作るを待たずして（為誰成早秀 不待作年芳）」は、誰のためにあまりにも早く花を咲かせるのか。春の到来を待ってやっと花を咲かせ、旧暦の正月に咲く香りのたかい花（年芳）にならないで……。この意味である。ここでは梅の花に対する李商隱の悲しみが詠まれている。この悲しみはまさしく彼自身の身の上に対する悲しみなのである。

それは李商隱が若くして文才によって有名であったことと関連している。そのことによって、李商隱は王茂元に認められ、その幕府に招かれて、彼の娘を嫁にもらったのである。しかし、王茂元は李德裕の党派に属していた。それが原因でそれまで世話になっていた令孤楚・令孤絢親子の属する牛僧孺の党派の怒りに触れてしまったのであった。その牛党が政権を握った時、李商隱は排斥された。彼が朝廷に入って、自分の才能を発揮することはなかったのである。これはまさしく梅の花が春の訪れを待たずして早くに咲いてしまったのと同じではないだろうか。この詩の終わりの二句では、自ら一生を傷む感情を詩の始めの二句と呼応させ、詩全体に詠まれている感情をいっそう深めているのである。

5

詠物詩として最も素晴らしいものは、「詩に物の気や姿を描き出すのに、その対象とする物の変化に自分自身も合わせる。詩に修辞と韻律を附すのに、自分自身の心とともに行ったり来たりする」⁽²¹⁾（《文心雕龍》物色篇）ものである。その意味するところは、事物の姿をそのままに描くのに、それとなくその姿を生き生きと描きだし、同時に細やかに心のなかの感情も伝える、ということである。この詩はまさにその通りに詠まれている。この詩は梅の花を詠んでいる。その梅の花は特定の環境と特定の時間のなかに咲いたものである。別の所に移すことなどできない。同時にそれは、李商隱の身の上の描写でもある。事物の描写と感情の描写とをこのように上手く結びつけている。そのやりかたはとても自然で、技巧的なところがみじんも見られない。これこそ李商隱の習練された技量があらわれたものなのである。

- (1) 【原注】《瀛奎律髓》において方回が次のように言っている。
三四句は、梅の花には月がもっともよく似合い、梅の花は霜を畏れない、ということ言っている。素娥青女の四文字を添えたのは、月は梅の花を自分のものだけにして、それをひとりで憐れんでいる。霜は梅の花を折ろうしても屈せさせることはできない。ということ言うためである。ずば抜けて素晴らしい。
この見解は詩の意味と合っていない。《瀛奎律髓刊誤》において紀昀は次のように言っている。
三句は、素娥は梅の花を愛していると言ってもそれは嘘で梅の花を照らしているわけではない。四句は、青女が梅の花を嫉んでいたのは本当で手加減をしないで痛めつけているのは本当である。
これは詩の意味にかなり近づいている。
- (2) 王茂元：(?～843) 唐の人。栖霞の子。諡は威。官は嶺南節度使。封は濮陽郡侯。
- (3) 涇原：今の甘肅省涇川県の北。唐代に涇原節度使が置かれていた。
- (4) 王茂元の幕府に入るために涇原に赴いた際に詠んだものではないようだ。：開成3年（838年）涇原に赴いた。
- (5) 東川：鎮の名。唐の至徳の初、劍南東川節度使が置かれた。治は梓州。四川省三台県。大暦の初、東川觀察使が遂州に置かれた。四川省遂寧県治。尋いで節度に昇された。
- (6) 柳仲郢：唐の人。公綽の子。字は諭蒙。元和13（818）の進士。官は刑部尚書。封は河東県男。咸通の間、このとき、出でて劍南東川節度使となっていた。《唐書》卷183・《旧唐書》卷165
- (7) 「扶風」は今の陝西省の宝鶏市の東にある。今の陝西省鳳翔県の南。唐の時、また岐州と改め、そのち扶風郡となった。
- (8) 韓冬郎：(844～923)「冬郎」は韓偓の小字。唐、萬年の人。字は致克。唐書は致光、漁隱叢話は致元に作る。号は玉山樵人。父は韓瞻。字は畏之。李商隱と同じ歳である。十歳にして詩を能くす。龍紀の進士。官は昭宗の時、兵部侍郎・翰林学士承旨。後、機密を処決し、甚だ帝意に合す。屢々相に擬せられたが皆固辞す。後、朱全忠に悪まれ、鄧州司馬に貶せらる。天祐中、故官に復するも、全忠の逆節を悪み、肯えて朝に入らず、閩に避けて王審に依り、其の地に卒す。その詩は慷慨激昂、忠憤の気に満つ。香奩集のみは縁情綺麗、艶体の一派を開き、香奩体と称せらる。《唐書》卷183
- (9) 〈韓冬郎即席二首〉：原題は〈韓冬郎即席為詩相送一座尽驚他日余方追吟連宵侍坐徘徊久之句有老成之風因成二絕寄酬兼呈畏之員外〉
- (10) 劍棧：蜀の劍閣に架けたはし。「劍閣」とは、長安から蜀（四川省）にはいる道にある大劍、小劍の二山に閣道（かけ橋）が多くあることから劍閣という（馮浩によると「劍棧」は李商隱自身のことを喩えている）「劍閣」については〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿—李商隱篇（2）—〉《大東文化大学紀要》第32号〈人文科学〉・大東文化大学発行・平成6年3月31日の注〔6〕を参考のこと。
- (11) 風檣：帆に風をいっばいに孕んだ舟の帆柱。（馮浩によると「風檣」は韓瞻のことを喩えている）
- (12) 冬：「氷」にするテキストもある。
- (13) 雪ふる冬にあなたと別れて都を出て、春になってようやく戻って参りました。：李商隱は大中5年の冬に梓州に赴き、大中10年の春に都に帰ったと言われる。
- (14) 散関：陝西省宝鶏県の南西の大散嶺にある関所。四川省と陝西省の交通の要地。大散関、峒谷ともいう。「散関」については〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿—李商隱篇（2）—〉《大東文化大学紀要》第32号〈人文科学〉・大東文化大学発行・平成6年3月31日の注〔6〕を参考のこと。
- (15) 〈悼傷の後東蜀の辟に赴きて散関に至り雪に遇ふ（悼傷後赴東蜀辟至散関遇雪）〉という詩：〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿—李商隱篇（2）—〉《大東文化大学紀要》第32号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成6年3月31日）の〔6〕を参照。
- (16) 「思いは風物の季節の変化に応じて変わり、言葉はその思ひの変化に応じて発せられる」：「情以物遷，辞以情発」
- (17) 李商隱は牛李の闘争に巻き込まれ：〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿—李商隱篇

(2)——) (《大東文化大学紀要》第32号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成6年3月31日)の[6]〈悼傷後赴東蜀辟至散関遇雪〉の注(1)を参照のこと。

(18) 高啓：(1336-1374) 明初の詩人。蘇州(江蘇省)の人。字は季迪。号は青邱子。

(19) 〈梅花詩〉に「月は林の下まで明るく照らし、その中をそぞろ歩きする美人の姿」とある：詩の全体をしめすと次のようである。

瓊姿只合在瑤台，	瓊姿只だ合に瑤台に在るべし，
誰向江南处处栽。	誰か江南に向かひて处处に栽う。
雪満山中高士臥，	雪が山中に満ちて高士臥し，
月明林下美人来。	月が林下に明るく美人来る。
寒依疎影蕭蕭竹，	寒に疎影に依るは蕭蕭たる竹，
春掩残香漠漠苔。	春に残香に掩ふは漠漠たる苔。
自去何郎無好詠，	何郎の去りてより好詠無く，
東風愁寂幾回開。	東風に愁寂として幾回か開く。

(20) 李商隱の〈霜月〉に「月の中、霜の中であてやかさを競いあっている」：李商隱〈霜月〉の全体をしめすと次のようである。

初聞征雁已無蟬，	初めて征雁を聞き 已に蟬無し，
百尺樓南水接天。	百尺の樓の南 水 天に接す。
青女素娥俱耐寒，	青女 素娥俱に寒さに耐へ，
月中霜裏鬪嬋娟。	月中 霜裏 嬋娟を鬪ふ。

(「寒」を「冷」にするテキストもある。)

(21) 「詩に物の氣や姿を描き出すのに、その対照とする物の変化に自分自身も合わせる。詩に修辭と韻律を付すのに、自分自身の心とともに行ったり来たりする」：「写氣図貌，既随物以宛轉。屬采附声，亦与心而徘徊」

漢宮詞

青雀西飛竟未回
 君王長在集靈台
 侍臣最有相如渴
 不賜金莖露一杯

漢宮詞

青雀は西のかたに飛びて 竟に未だ回らず
 君王は長へに在り 集靈台
 侍臣 最も相如の渴有れども
 金莖の露一杯をも 賜はらず

この〈漢宮詞〉という詩は、社会的意義に富んだ詠史詩である。詩人は想像の翼をひろげて高々と飛翔し、神話や伝説と、歴史的な物語とを巧妙に一つに絡みあわせ、ロマンチックないろどりに満ち、芸術性に富んだイメージを創り出したのである。

1

「青雀西飛竟未回 君王長在集靈台（青雀は西のかたに飛びて 竟に未だ回らず、君王は長へに在り 集靈台）」の「青雀」とは、《山海經》のなかで西王母の「使い」をしていた青い鳥⁽¹⁾のことである。この詩のなかでは、西王母のために漢の武帝とのあいだで便りを受けわたす使者のことを喩えているのである。使者である青い鳥は、はるか彼方への重い任務を負って、西方の極楽世界に飛んで行った。だが、あろうことか、それっきり戻って来ず、その足どりは杳としてつかめなかった。しかしながら、おろかにも仙人となって仙界に行くことを夢見ていた漢の武帝は、あいかわらず望仙宮（集靈台⁽²⁾のこと）に留まりつづけ、吉報を待っていたのである。

2

詩の批評家は「七言詩の第五字目は響きがなければならない」⁽³⁾、「いわゆる『響き』とは、詩人が詩作の際に力を入れるところである」⁽⁴⁾（《茗溪漁隱叢話》⁽⁵⁾上卷十三に引く《呂氏童蒙訓》⁽⁶⁾より）と言う。

この詩の起句のなかでは、「竟」という字がまさしく「響き」のある字であり、非常に豊かな意味を含んでいる。それは漢の武帝の神仙への盲目的な信奉という間ぬけた心理を緻密に、かつ鋭く表現しているのである。すなわち、漢の武帝は、「青雀」が西の方へと飛んで行き、きっと仙界のよい便りをもたらすはずだと、ひたすら信じて疑わなかった。したがって、「青雀」が飛びたっただけで、「竟」に（結局は）もどって来ないことなど、誰にも分からなかった。これは漢の武帝にとって本当に予想外のことだったのである。詩人は「竟」という一字を用いることで、誤りに固執して悟らない漢の武帝のこのような心理のありさまを、真にせまって表しているのである。

つづいて「長へに在り 集靈台」の句では、神仙を乞い求める漢の武帝の行為を洗いざらいさらけ出しており、そこには、しっかりした基盤と内在するエネルギーがあるように思われる。は

はじめの二句は、神仙にうつつを抜かしている漢の武帝の妄想をするどく暴き出している。さらっとしたさり気ない描写のなかに、揶揄とあざけりをこめており、いかにも婉曲でおもむきがあるように見え、きわめてユーモアに富んでいるのである。

3

後半三・四句では、詩人はさらに漢の武帝がひたすらに神仙のみを求めて、才能のある人を求める意思が無いという考え方や行いを描きだしている。

侍臣最有相如渴 侍臣 最も相如の渴有れども
不賜金茎露一杯 金茎の 露一杯をも 賜はらず

文章の才によって漢の武帝に仕えた司馬相如は消渴病（現在で言う糖尿病）であった。水は、この病を患っている人にとって重要なもので、「命を救う水」⁽⁷⁾とも言える。しかしながら、漢武帝はただ自分の長寿のみを願い、才能のある人物の生き死にをまったく顧みなかった。渴きを癒し命を救う一杯の露さえも司馬相如に与えようとしなかったのである。「金茎露」とは、「雲表之露」⁽⁸⁾のことで、銅で作った仙人がささげもった「承露盤」に貯えられた「露」のことである。「承露盤」は、漢武帝が建章宮の神明台に建てたものである。

後半二句「侍臣最有相如渴，不賜金茎露一杯（侍臣 最も相如の渴有れども 金茎の 露一杯をも 賜はらず）」で、詩人は、量のきわめて多いことをあらわす副詞の「最」と、きわめて少ない数をあらわす「一」とを用いて対比させている。その「最」と「一」とを前後で呼応させることで、武帝の神仙を好むことが人材を惜しむことよりも勝っているという極端に身勝手な人格をみごとに暴き出している。「最も相如の渴有る（最有相如渴）」にもかかわらず、「金茎の露 一杯をも賜はらず（不賜金茎露一杯）」という諷刺は辛辣で鋭いと言い得よう。詩のなかの数字は「量」を表すだけではなく、「質」まで明らかにしていて、深い意味を含んでいる。

4

〈漢宮詞〉は漢代のことを詠んではいる。しかし、唐代の実際の生活と密接に関わっている。唐の武宗は会昌五年（845）に、「望仙台を南郊に建て」⁽⁹⁾、さらに不老長寿の薬を服用したり、「方士の練った金丹を飲んだりしたので、気みじかになり、感情の起伏が激しくなった」⁽¹⁰⁾。もし、この詩が漢武帝の迷信と愚かさを諷刺するという側面について、諷刺があからさまで鋭いものであると言うとすれば、唐の武宗に対する諷刺はおもてに現れておらず、こみいって婉曲で、はっきりとは判らないように感じられる。

李商隱はいつも司馬相如をもちいて自らを喩えている。たとえばそれは以下のような詩に見える。

○嗟余久抱臨邛渴 嗟 余 久しく臨邛に渴を抱え
便欲因君問釣磯⁽¹¹⁾ 便ち君に因りて釣磯を問はんと欲す

- 休問梁園奮賓客 問ふ休めよ 梁園の奮賓客
 茂陵秋雨病相如⁽¹²⁾ 茂陵の秋雨 病相如
- 相如未是真消渴 相如は未だ是れ真の消渴ならざるに
 猶放沱江過錦城⁽¹³⁾ 猶ほ沱江に放ちて錦城を過ぎるがごとし

〈漢宮詞〉の後半二句も、やはり李商隱自身の身の上についての感慨と、唐の武宗が人材を重んじないことに対する不満が含まれているだろう。詩人の典故の用い方は巧妙かつ適切であり、柔軟で無理がない。あからさまには言えないけれども言わずにはいられない、そのようなことを婉曲に表している。そして辛辣な諷刺や嘲笑のうえに、神話や歴史や現実を巧妙に織りこんだペールをかぶせているのである。ひとびとに芸術的な感銘をあたえ、その心を魅了する力に富んでいるように感じられる。先人、清の葉燮は《原詩》において「李商隱の七絶は、寄託している意味内容はおくぶかく、言葉づかいは婉曲である。」⁽¹⁴⁾と評している。この評語は、そのまま、この〈漢宮詞〉の芸術的な特色をも言いあてている。

何国治（宮下聖俊訳）

-
- (1) 【原注】《山海経》の〈海内北経〉と〈大荒西経〉に見られる。：《山海経》第十二〈海内北経〉に「西王母梯几而戴勝杖。其南有三青鳥，為王母取食。」とある。また第十六〈大荒西経〉に「西有王母之山，……有三青鳥，赤首黒目，一名曰大鷲，一名曰小鷲，一名青鳥。」とあり、その割り注に「皆西王母所使也。」とある。
- (2) 【原注】集霊台：漢武帝が仙人になるために建造させた建築物を言う。集霊宮や望仙台などがあつた。唐代にも集霊台があり、華清宮や長生殿のかたわらにあつた。
- (3) 「七言詩の第五字目は響きがなければならない」：原文は「七言詩第五字要響。」
- (4) 「いわゆる『響き』とは、詩人が詩作の際に力を入れるところである」：原文は「所謂響者，致力処也。」
- (5) 《苕溪漁隱叢話》：前集六十卷・後集四十卷。宋，胡仔撰。北宋以前の詩話を網羅する。
- (6) 《呂氏童蒙訓》：二卷。宋，呂本中撰。家塾訓課の本で，正論格言が多い。
- (7) 「命を救う水」：原文は「救命之水」。未詳。
- (8) 「雲表之露」：《魏書》卷二十一の衛顛の伝に「昔漢武信求神仙之道，謂当得雲表之露以餐玉屑，故立仙掌以承高露。」とあり，《文選》卷二所収の張衡〈西京賦〉には「立修莖之仙掌，承雲表之清露，屑瓊蕊以朝餐，必性命之可度」とある。また《三輔黄図》卷之三〈建章宮〉に〈神明台〉の解説を載せるが，そこに「神明台。漢書曰，建章有神明台。廟記曰，神明台，武帝造，祭仙人処。上有承露盤。有銅仙人舒掌，捧銅盤玉杯，以承雲表之露。以露和玉屑服之以求仙道。長安記，仙人掌大七围，以銅為之。魏文帝徙銅盤折声聞数十里。」とある。これらによれば，次のように言える。漢の武帝は，大きな仙人の銅像を建章宮の神明台に建てた。これが金銅仙人と呼ばれるものである。その掌が捧げ持つように，銅の大皿が据え付けられていた。これが承露盤である。武帝はそこにたまった露に玉の粉を混ぜて飲み，仙人になることを願ったという。この金銅仙人像は，三國魏の明帝によって景初元年（西暦237年）に長安から洛陽に移された。李賀には，そのことを題材にした〈金銅仙人辞漢歌并序〉がある。
- (9) 「望仙台を南郊に建て」：原文は「築望仙台于南郊」
- (10) 「方士の練った金丹を飲んだりしたので，気短になり，感情の起伏が激しくなった」：原文は「餌方士金丹，性加躁急，喜怒不常。」
- (11) 「嗟余久抱臨邛渴，便欲因君問釣磯。」：〈令狐八拾遺絢見招送裴十四歸華州〉
- (12) 「休問梁園奮賓客，茂陵秋雨病相如。」：〈寄令狐郎中〉

- (13) 「相如未是真消渴，猶放沱江過錦城。」：〈病中早訪招國李十將軍遇挈家遊曲江〉
- (14) 「李商隱の七絶は，寄託している意味は奥深く，言葉遣いは婉曲である。」：原文は「李商隱七絶，寄託深而措辞婉。」葉燮の《原詩》外編下に見える文章。なお，葉燮は，清の人。紹袁の子。字は星期。号は己畦。康熙の進士。宝応知県となったが，弾劾されて故郷に帰った。また，同様の文章が〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿——李商隱篇（1）——〉（《大東文化大学紀要》第31号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成5年3月31日）の〔3〕〈霜月〉に見える。その注（9）（10）を参照のこと。

馬 嵬

海 外 徒 聞 更 九 州
 他 生 未 卜 此 生 休
 空 聞 虎 旅 鳴 宵 柝
 無 復 鷄 人 報 曉 籌
 此 日 六 軍 同 駐 馬
 当 時 七 夕 笑 牽 牛
 如 何 四 紀 為 天 子
 不 及 盧 家 有 莫 愁

馬 嵬

海外 徒らに聞く 更に九州ありと
 他生は未だ卜せず 此の生は休む
 空しく聞く 虎旅の 宵柝を鳴らすを
 復た鷄人の 曉籌を報ずる無し
 此の日 六軍 同じく馬を駐め
 当時 七夕に 牽牛を笑ふ
 如何ぞ 四紀 天子と為りて
 盧家の 莫愁あるだに及ばざる

唐代の人が「馬嵬の変」について詠じている詩はたくさんある。それらは芸術的な表現においてそれぞれ特色がある。しかし、詩にあらわれている考え方の傾向について見てみると、大多数は楊貴妃に罪を着せ、玄宗を弁護するものである。だが、李商隱のこの七言律詩は、考え方と芸術性の両面においてあらたな方向が示されている。

1

この詩が〈馬嵬〉と名づけられたのは、玄宗が、馬嵬の駅において「六軍」に楊貴妃に死を賜うよう強いられたことに重点を置いているからである。この詩ははじめから色々な話が盛り込まれている。まず「海外」に「更に九州」があるという歴史上の事実をもちいて、方術の士が海外の仙山に楊貴妃をたずねたという伝説をまとめている。そして「徒らに聞く（真偽は定かではないが、ただ聞いた）」という表現を用いて、否定のニュアンスを加えているのである。玄宗は楊貴妃が仙山にいて、「いつの世においても夫婦となろう」⁽¹⁾という秘密の約束をまだ覚えているということを聞き、楊貴妃の死をたいそう哀しみいたんだ。

しかしこの句にはほかに一体どのような使い方があるのだろうか。「他生（あの世）」で夫婦になることは、漠然として予測できないし、「此生（この世）」の夫婦関係はすでに分かりきった結末をむかえている。どのように終わったのか。それはきわめて自然に「馬嵬」という題に投影されている。「徒聞（真偽は定かではないがただ聞いた）」、「未卜（未だ漠然として予測できない）」それに「休（終わってしまった）」のような、おのずと現れでている諷刺する口調は、次につづく句もさらに諷刺をつづけるのだという文脈の基調を定めているのである。

2

中間の二つの聯（空聞虎旅鳴宵柝，無復鷄人報曉籌。此日六軍同駐馬，当時七夕笑牽牛）はす

ぐ前の「此生休（この世での夫婦関係は終わってしまった）」をうけて「馬嵬の変」の内容を描写している。「馬嵬の変」をえがくことは、タイトルが「馬嵬」であるいじょう、当然である。したがって、注目すべきは、「馬嵬の変」の描き方に独創性があることである。

まず頷聯「空聞虎旅鳴宵柝 無復鷄人報曉籌（空しく聞く 虎旅の 宵柝を鳴らすを 復た鷄人の 曉籌を報ずる無し）」を見てみたい。長期間にわたり「太平の世の天子」⁽²⁾の座にあり、淫楽な生活にひたりつづけた唐の玄宗とその寵姫に、軍営の内にて時を知らせる拍子木の音が、どうして聞こえてくるだろうか。宮中において、おんどりを養うことは許されておらず、こころ安らかに眠るため、おんどりが夜明けを告げる声まねをする専任の者がいた。

詩人はもっとも特徴的な事柄をつかみ取るため、ただ「虎旅鳴宵柝（王車守衛の兵士の鳴らす宵の拍子木）」という五字をもちいた。これは災難よりのがれる途中の典型的な状況をひきたたせる。さらに主人公のうろたえるようすと、あわてて混乱する気持ちが、ほんやりとも分かる。

詩人はさらに宮廷内で「鷄をかたどった朱の冠をかむり寢所にまで夜明けの時を知らせる（鷄人報曉籌）」という表現をもちいて、馬嵬駅で「王車守衛の兵士が宵の拍子木を鳴らす（虎旅鳴宵柝）」ことをひきたたせている。そしてむかしは楽しく平安でも、いまは苦しく危険であるという同じではない境遇や心境をありありと表現しているのである。

「王車守衛の兵士が宵の拍子木を鳴らす（虎旅鳴宵柝）」のは、ほんらいパトロールや警備をおこなうのであって、それによって皇帝や貴妃の安全が守られていた。しかしそれに「うつろに聞く（空聞）」という二字を冠することで、意味がちょうど反対になっている。詩の構成から考えると、「うつろに聞く（空聞）」というのは「現実の人生はおしまいになる（此生休）」というのを承けて、五句目の「近衛兵は一斉に馬をとどめる（六軍同駐馬）」ことにまで話を展開させている。「王車守衛の兵士（虎旅）」が「宵を告げる拍子木を鳴らす（鳴宵柝）」とはいっても、皇帝や貴妃の安全を守るためではない。反乱を起こそうとして鳴らしているのである。だからこそ、「鷄をかたどった朱の冠をかむり寢所にまで夜明けの時を知らせる守衛の者もいなかった（無復鷄人報曉籌）」のである。

3

頷聯と頸聯はともに馬嵬で起きた悲劇の経過をえがいている。場面の展開は非常にはやく、対比をもちい、時間と空間にておおきな跳躍がある。頸聯の「此日六軍同駐馬、当時七夕笑牽牛（この日近衛兵は禍のもと楊貴妃にあるとして、いっせいに馬をとどめ、楊貴妃がくびり殺されるまでは前に進もうとはしなかった。かつて七夕の宵、高樓によりそいつつ、玄宗と楊貴妃は一年に一度しか織女にあえぬ牽牛を笑っていたのに……）」という表現は、長いあいだ伝えつづけてこられた名句である。

ここでは「近衛兵は一斉に馬をとどめる（六軍同駐馬）」と言うだけで、「馬をとどめた（駐馬）」ことの原因や結果に言及していない。しかしながら、「かつて七夕の宵、高樓によりそいつつ、玄

宗と楊貴妃は一年に一度しか織女にあえぬ牽牛を笑っていた（七夕笑牽牛）」という表現と照らしあわせることで、その意味合いはゆたかになり、味わうに耐えるものとなる。

玄宗は七夕の時、楊貴妃と「ひそかにたがいのむねのうちを誓いあい（密相誓心）」⁽³⁾、一年に一度しか会えない牽牛と織女をあざ笑ったのである。そして二人は「世世為夫婦（いつの世にあっても夫婦となろう）」というように、永遠に離れまいと誓ったのだ。

けれども「近衛兵が出発しない（六軍不発）」⁽⁴⁾事態になった結末はどのようになるのだろうか。頸聯の二句を対比させて見ることで、楊貴妃が死を「賜」わったという結末を、言外に読みとるのは難しいことではない。さらに、玄宗の不誠実で、自分勝手なところのありさまをも、残さずあらわにされているのである。同時に「かつて七夕の宵、高樓によりそいつつ、玄宗と楊貴妃は一年に一度しか織女にあえぬ牽牛を笑っていた（七夕笑牽牛）」という表現は、玄宗が女性の色香にうつつを抜かしたり、国政を長いあいだほったらかしたりということを典型にまとめたものである。この句を用いて、「近衛兵は一斉に馬をとどめる（六軍同駐馬）」という表現と照らし合わせることで、二句の因果関係をあらわしている。「当時」の荒れすさんだ生活があったからこそ、「此日」の別れがあったのだ。句がここまで進んでくると、尾聯の一つの問いはすでに放たれた矢のようで、今にも的をうち破ろうとするかに見える。

4

尾聯の「如何四紀為天子 不及盧家有莫愁（如何ぞ 四紀 天子と為りて 盧家の莫愁あるだに及ばざる）」という表現もはっきりとした対比をふくんでいる。

一方は、四十年以上皇帝であった玄宗が自分の寵妃である楊貴妃を守ることができなかったという内容である。詩の構成から言うと、これは前の六句の総括にあたる。もう一方は、ふつうの庶民である盧家は「あやぎぬを織る（織綺）」のが上手なうえに、「桑とり（采桑）」もできる妻の莫愁を守りとおすことができたという内容である。芸術的な構想から言えば、これは前の句（七句目）から思いおこされた連想である。

この二つの面には、おのおの深刻な社会的意義があり、「なぜ（如何）」と問うにあたいする。詩人はさらにこの二つをあわせ関係づけて、ひややかで厳しい詰問を出す。その内容は、「ふつうの家庭は自分の妻を守りとおすことができたのに、四十年以上も皇帝であった玄宗にどうしてそれができなかったのか」というものである。

この詩の前六句での批判の矛先は、みな唐の玄宗にむいている。そして詩の最後に、読者がさまざまに詮索してはじめて全面的に回答できるような問いを發し、それを結びとしたのである。そのため、いっそう批判的な意味あいを増しているのである。

霍松林（鈴木拓也訳）

(1) 「いつの世においても夫婦となろう」：原文は「願世世為夫婦」。『文苑英華』巻794中の〈長恨歌傳〉

陳鴻 作に「因仰天感牛女事。密相誓心。願世世爲夫婦。」とある。

- (2) 「太平の世の天子」：原文は「太平天子」。未詳。
- (3) 「密相誓心（ひそかにたがいのむねのうちを誓いあうこと）」：未詳。
- (4) 「六軍不發（近衛兵が出発しない）」：白居易〈長恨歌〉の37句目に「六軍不發無奈何（六軍發せずいかんともする無し）」とある。

富平少侯	富平少侯
七 国 三 辺 未 到 憂	七 国 三 辺 未 だ 憂 ひ に 到 ら ず
十 三 身 襲 富 平 侯	十 三 に し て 身 は 富 平 侯 を 襲 ぶ
不 収 金 弾 抛 林 外	金 弾 を 収 め ず し て 林 外 に 抛 ち
却 惜 銀 牀 在 井 頭	却 っ て 銀 牀 の 井 頭 に 在 る を 惜 し む
綵 樹 転 燈 珠 錯 落	綵 樹 転 燈 珠 は 錯 落 と
繡 檀 廻 枕 玉 雕 鏤	繡 檀 廻 枕 玉 は 雕 鏤 たり
当 関 不 報 侵 晨 客	当 関 侵 晨 の 客 を 報 ぜ ず
新 得 佳 人 字 莫 愁	新 た に 佳 人 を 得 字 は 莫 愁

これは古えの事柄にかこつけて、当時の唐代を風刺した作品である。

漢の張安世は、富平侯に封ぜられ、彼の孫の張放は幼くしてその爵位を受けついだ⁽¹⁾。しかしこの詩に歌われている内容は、張放が行ったこととぴったりとは合わない。ここから詩中の「富平少侯」が、ただ名前だけを借りている人物に過ぎないことがわかるのである。

1

第一句「七国三辺未到憂」の「七国」⁽²⁾は、唐代に藩鎮が割拠して叛乱したことを喩え、「三辺」⁽³⁾は異民族が辺境を侵したことを指している。「未到憂（未だ憂ひに到らず）」とは、まだそれらの「憂い」を知らないということである。

この句は、順番を逆にするという手法がうまいぐあいにつかわれている。さきに少侯が国家の「憂い」が何であるかを知らないことを問題としてとりあげ、第二句で、かさねて「十三」歳で位を受け継いだということに気づかせるようにしている。これは、幼くて無知であることと、身分が高いこととのあいだにある大きなギャップをはっきり示しているのである。

もし、さきに少年が富平少侯の位を受け継いだと言ひ、その後には国家の政治をかえりみないというのであれば、内容がまったく同じでも、それでは平板で奇抜さがなくおもしろみが激減し、上でのべたようなギャップをずばりと表わすことはできない。このような、趣向をこらした描き方は、作者が特に強調させたいとする意図と、往々にして密接な関係がある。

2

頷聯「不収金弾抛林外 却惜銀牀在井頭」は、「少侯」がぜいたくに遊んでいるさまを描写している。「金弾を収めず（不収金弾）」という表現は韓嫣の故事を用いている。《西京雜記》⁽⁴⁾に以下のようにある。

韓嫣は弾弓が好きで、金を用いて弾を作った。一日で十個あまりの弾を見失ってしまう。子どもたちは、韓嫣が弾を飛ばすと聞くと、いつも彼につきしたがって、弾をひろった。(5)

前の句「不収金弾抛林外」は、彼が心ゆくまでのしみを求め、貴重な「金の弾」が林の外にほったらかされたままでもかまわず、ひろいに行かないと言っている。これは言うまでもなく、ひじょうに贅沢なことである。

次の句「却惜銀牀在井頭」は、次のようなことを描いている。井戸端に設けられている轆轤の桁（「銀床」のこと。実際は銀を用いて作るものと決まっているわけではない）などは必ずしも貴重ではない。なのに、そのようなものへの愛惜の思いをかなりもっているということである。

これは、高価な「金の弾」をひろいに行かないことと、それほど高価でもない井戸の轆轤の桁を大切にしていることとを鮮やかに対比させることによって、彼が如何に無知であるかを描きだしているのである。

黄徹(6)は次のように言っている。「この二句は貴公子の子どもっぽい態度を言い尽くしている」(7)と。黄徹が言うように、この二句「不収金弾抛林外 却惜銀牀在井頭」は確かに、李商隠が諷刺しようとする対象の特徴をぴったり言いあてており、生き活きとして真にせまった描写となっている。風刺のなかに、味わい深いユーモアが現れでている。

3

頸聯「綵樹軒燈珠錯落 繡檀廻枕玉雕鏤」はそれにつづいて、富平少侯の室内の装飾品が豪奢であることを描いている。「彩樹」は、華やかな灯柱（灯籠をかける柱）のことである。「繡檀」は、精巧で美しい檀の木まゆみの枕を意味している。「鏤」（sou と読む。「搜」と同じ）は、彫刻するという意味である。

この二句が言っていることは次の通りである。

華麗な灯柱（灯籠をかける柱）のあたりが、幾重もの蠟燭の明かりに取り囲まれている姿は、まるで真珠が輝いているようである。また、檀の木まゆみの枕のまわりが、ぐるりと透かし彫りされているさまは、ちょうど精巧で美しい玉の彫刻のようである。

前の一聯「不収金弾抛林外 却惜銀牀在井頭」にある「金弾を回収しない（不収金弾）」「しかし銀床はおしむ（却惜銀牀）」という表現には、諷刺しよう、揶揄しようという作者の意図が感じられる。それに対して、この五・六句目では、ただ客観的な描写方法のみを用いており、諷刺の意図は言外にこめられているのである。したがって、頷聯と頸聯の内容はよく似ているけれども、読んでみると、重複しているといった感じはまったくない。「灯」と「枕」はひそかに最後の聯への橋渡となっている。しかし、そのやり方は、緻密な裁縫のようで、その痕跡をとどめていないのである。

尾聯「当関不報侵晨客 新得佳人字莫愁」はこの詩全体のしあげとも言える書きぶりである。この二句は以下のことを言っている。

門番は、明け方やって来た客人にとりつぎをしなかった。それは、少侯が新たに「莫愁」という名の美人を手に入れたからである。

「莫愁」というのは、洛陽の人で、廬家にとついだ。ここではとくに「莫愁」、すなわち「愁い莫し」という字面を借りて首句の「憂いをまだ知らない（未到憂）」というのと同様にして、少侯が女色におぼれて国事を「憂」えないことを諷刺しているのである。

さらに「憂い」があるのに「憂い」を知らないことによって、必ずさらに大きな「憂い」がもたらされることをこっそりと言外に諷刺しているのである。つまり、今「愁いが莫い（莫愁）」ということには将来の深刻な「憂い」がはらまれているのである。

詩人のこのような思想や感情は、まったく表現されていない。それでいて、それを無理なく、あたかも感情を表にださないような客観的な叙述のなかにとけあわせているのである。そのため、非常にとげとげしく情け容赦がないけれども、味わいぶかい書きぶりになっているのである。

この〈富平少侯〉を自堕落で無知な貴族の少年を諷刺している詩とみなしたとしても、当然のことながら、すぐれた作品であることに変わりない。しかし、「富平少侯」という詩題のつけ方と、首聯（一・二句）と尾聯（七・八句）のふたつの聯から見ると、詩のなかの「富平少侯」は貴族の普通の少年ではないように思われる。別に何か具体的な人物を仮託しているのかも知れない。

清代の注釈家の徐逢源⁽⁸⁾は、この詩は敬宗を諷刺していると推定している。その根拠としてつぎの二つのことをあげている。ひとつめは、唐の敬宗は年若くして位を継ぎ、好んで贅沢をし、狩りが好きで、酒盛りの遊びは節度がなく、とりわけ組みひもや、透かしぼりの彫刻を気に入っていて、朝廷で政務を取る時になってもいつも遅刻していたことである。二つめは、漢の成帝はいつも自ら富平侯のしもべだと称していたことである。⁽⁹⁾

徐逢源のこの考えかたはたしかに信用しうるものである。なぜなら諷刺される対象が、もし貴族の普通の少年であれば、彼らに関心をもつものは、もともと女色や狩猟なので、「七国三辺（節度史の叛乱・辺境からの侵略）」を「憂え」ないことを責め立てたとすると、まとはずれだと言わざるをえないのである。

国の「憂え」に直面しているのに、国を「憂う」立場にありながら「憂え」ない。だからこそ「未到憂（まだ憂いを知らない）」という表現によってこの人物を非難しているのである。だから最初の句「七国三辺未到憂」で、すでに、いわゆる富平「少侯」とは、ほんとうは「少帝（年

若い天子)」であるということをほのめかしているのである。

馮浩は次のように言っている。「はじめの七字は、もっとも重視するべきである」⁽¹⁰⁾と。これは一句目のなかに仕込まれた仕掛けを見破っているのである。

末句は「莫愁（愁い莫し）」という言葉を用いて、その最後に「憂い」になってしまうであろうことを暗に諷刺しているのである。それは〈陳后宮〉の結句「天子正に愁ひ無し」⁽¹¹⁾と酷似している。これも諷刺されている者は無知な貴族ではなく、「憂いを知らない天子」であることを暗示しているのである。ましてや貴族のふつうの少年を諷刺するのであれば、はっきりと言うことができる。古えのことにかこつけて諷刺するまでもない。さらには、「富平少侯」というあまり見かけない題目を用い、しかも詩中では富平少侯本人のことにはふれないで、わざと輪郭をぼやかすまでもない。

古えのことにかこつけてその当時のことを諷刺したり、ある特定の対象を諷刺する李商隱の詠史詩は、その題目と内容とはしばしば近いようでもあるし、また離れているようでもある。その詩のなかで詠じられていることがらも「昔」のことと「今」のことが入りまじっている。そしてわざと小さな糸口だけを示して読者を、詩の中で寓されているものを考えさせるようにしているのである。この詩〈富平少侯〉は、そのような詩の顕著な例である。

当然、古えのことにかこつけてその当時のことを諷刺する作品では、かこつけられる「昔」のことがらと、諷刺される「今」のことがらが、大体において似ていることが求められるにすぎない。それらをひとつひとつ細かく一致させることはできないし、また一致させる必要もない。これはわざわざ言うまでもないことであろう。

劉学鍇（秋谷幸治訳）

-
- (1) 漢の張安世は、富平侯に封ぜられ、彼の孫の張放は幼くしてその爵位を受け継いだ：馮浩《玉谿生詩集箋注》に「《漢書》〈張湯傳〉『張安世封富平侯，伝至張放，以公主子敏得幸。放与上臥起，寵愛殊絶。』按，放之嗣爵《漢書》不書其年，此云「十三」何拠。《家語》『周成王年十有三而嗣立』疑其影用之。」とある。
 - (2) 「七国」：曹岡〈六代論〉呂延濟の注に「漢景帝時七国反，謂吳・膠西・楚・趙・濟南・淄川・膠東。」とある。
 - (3) 「三辺」：王応麟《小学紺珠》に「三辺，幽，并，涼三州。」とある
 - (4) 《西京雜記》：六卷。晋の葛洪の編。西京すなわち漢の都長安の天子・后妃および有名人の逸話や宮室・御苑・制度・風俗などに関する話を覚え書きふうに記録したもの。
 - (5) 韓嫣は弾弓が好きで、金を用いて弾丸を作っていた。見失ってしまう玉は、一日で十余りだ。子どもたちは、韓嫣が弾弓の玉を飛ばしたと聞くと、いつも彼に付き従って、弾き弓の玉を拾っていた、と。：《西京雜記》卷四に「韓嫣好彈，常以金為玉，所失者日有十余，長安為之語曰，『苦飢饉寒遂丸』京師兒童聞嫣出彈，輒隨之望丸之所落，輒拾焉」とある。
 - (6) 黄徹：宋，莆田の人。字は常明。号は鞏溪。宣和の進士。主な著に《鞏溪詩話》がある。
 - (7) 黄徹は次のように言っている。「この二句は貴公子の子どもっぽい態度を言い尽くしている」と：ここでは「二四句曲尽貴公子憨度」を黄徹のことばと言っているが、黄徹の著作の中からこのことばを見つけることはできない。宋・劉克庄《後村詩話》に「義山云，不取金彈拋林外，却憶銀牀在井頭，曲尽貴公子之憨度」という句があるのでおそらくその部分を引き間違えたのであろう。

馮浩《玉谿生詩集箋注》が、「二四句曲尽貴公子愆度」を黃徹《鞏溪詩話》にあることばと言っていることから、誤ってしまったのだと考えられる。

(8) 徐逢源：吳江の人。徐湛園のこと。その他、未詳。

(9) まず、唐の敬宗は年若くして位を継ぎ、好んで贅沢をし、狩りが好きで、酒盛りの遊びは節度がなく、とりわけ組みひもや、透かしぼりの彫刻が気に入っていて、朝廷で政務を取る時になってもいつも遅刻していたことである。二つめは、漢の成帝はいつも自ら富平侯のしもべだと称していたことである。：馮浩《玉谿生詩集箋注》が引く徐逢源の言に「此為敬宗作，帝好奢好狩，宴遊無度，賜与不節，尤愛纂組雕鏤之物。視朝每晏，即位之年三月戊辰，群臣入閣，日高猶未坐，有不任立而陪者。事皆紀・伝。《漢書》『成帝初為微行，從私奴出入郊野，每自称富平少侯家人。』而敬宗即位年方十六，故以富平少侯為比，不敢顯言耳。…」とある。

(10) 馮浩《玉谿生詩集箋注》に「此章首七字最宜重看」とある

(11) 〈陳後宮〉：茂苑城如画，闔門瓦欲流。 茂苑城は画の如く，闔門の瓦は流れんと欲す
環依水光殿，更起月華樓。 環た水光殿に依りて，更に月華樓を起つ
侵夜鸞開鏡，迎冬雉献裘。 夜を侵す鸞は鏡を開き，冬を迎うる雉は裘を献ず
従臣皆半醉，天子正無愁。 従臣は皆半ば酔い，天子は正に愁い無し